



## はじまらないこと

---

夕立、赤い観覧車、一人きり。またこの夢か、と僕は思った。月に何回かは必ず見る夢。決まって前日に、自分のバンドのスタジオ練習があったときに、この夢を見る。理由はよく分からない。

「あの一」

ん？女性の声がある。ついに新たな登場人物が出てきたのか！？

「あの、すみません。精算したいんですけど」

そこで僕は、ぱっと目を開いた。あーやってしまった。

「大丈夫ですか？」

「ふぁ、す、すみません。今すぐに」

「えっと、Cスタジオで4時間パックでしたので2730円になります」

僕は中野にある音楽スタジオでアルバイトをしている。今は午後9時。お客さんは、文化祭に向けて組んでいるらしい、男女2人ずつの高校生のバンドのみだ。

彼女らは、よくここのスタジオを利用してきている。もうかれこれ10回くらいだろうか。どんな音楽を演奏するのだろう。

僕は彼女らに、あるいは最近の高校生について少し考えてみる。

やはりテンポの速い曲なのだろうか。ロキノン系とかっていうやつ？ドラムが1曲まるまる、ドタン、ドタンと刻んでたりして。もしくは尋常じゃないほどのアンダーグラウンドな世界を表現するような、異色バンドか！？

どれでも良いが、最後のは絶対はないな。

「スギさん、これをお願いします」

彼女は僕のことをスギさんと呼ぶ。たしかに良く会話をする関係ではあるが、いくら僕の本名が杉崎だからと言って、高校生にスギさんって呼ばれたら、なんだか変な気持ちになってしまう。なんのこっちゃ。

「1270円のお返しになります」

「どうも。私たち、秋にある文化祭でライブするんです。良かったら来て下さいね」

「そうなんですか。空いてたら、必ず聴きに行きます」

「お願いします」

やっぱり文化祭に向けてだったか。

「ユミー。早く帰ないと、ママに怒られちゃうよー」

「すぐいくよー」

「おつかれさまでした」

「おつかれさまでした。またきます」

彼女らが帰った後のスタジオはやけに静かになった。少し気分が良いなと思った。

このあとは予約が入っていないので、曲でも作るか、と意気込んで、スタジオにある貸出専用ギターで作曲を開始。だが10分で断念。やっぱり僕には才能がないんだなと落ち込んだ。だからこうして、大学出してから就職もせずに、音楽スタジオでアルバイトをする生活なんだなと、さらに落ち込んだ。

つきたくないため息をつく。これから先すっごく不安だなあという、余計なネガティブ思考回路。音楽は好きだけど、才能がないんじゃないかね、とか諦めてるくせに、まだしつこく持っているちょっとの希望。どれもくだらない。

「グァーン、グッ、グッ、グァグァーン、グァーングッ、グァーングァーン、ポォー！」

またそれか、とまた違った意味でのため息を僕はついた。深夜帯で働いてる先輩の高田さんがやってきたのだ。

「スギちゃん！また暗い顔してるよ！全然ロックじゃないね！もっと盛り上がっていきようよ！ポォー！」

独身で32歳の高田さんはいわゆる往年のグラムロックやらハードロックあたりがとても大好きらしく、その中でもT-REXを特別に愛しているらしい。もう何年も洗っていないようなボサボサのロングヘアーで、必ず自慢のオールドギターのレス・ポールを持ってきている。それでも服装はきちんとジャケットを羽織っていたりして、つつこみどころ満載なのだが、もう一歩！という人なのである。そしてなぜいつも語尾に、マイケル・ジャクソンが出てくるのかは未だに謎。

「スギちゃん！もうチェンジでいいからね！帰ってちゃんと寝なさい！ポォー！」

「はい、ありがとうございます。おつかれさまでした」

逃げるようにして去った僕は、荷物の簡単な片付けを済まし、スタジオを後にした。外に出ると、昼にここに来たときよりもジメジメしていた。空は曇っている。

だから梅雨の時期は嫌いなんだよなあ。一人でいるときも、誰かと触れあっているみたいで。

帰ったらすぐにシャワーを浴びて寝よう。それだけを考えて、僕は静かな路地裏を自転車に乗って走り出した。